



金沢大学
古代文明・文化資源学研究所

要覽 2022

Kanazawa University
Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources
Bulletin 2022



目次

ごあいさつ	3
概要	4
運営組織	5
研究組織	5
専任・兼任教員の研究概要	7
外部研究資金採択情報	18
諸規程	20



ごあいさつ

金沢大学古代文明・文化資源学研究所は、本学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクス（古代ゲノム学）を融合させて格段の進化を図り、文理融合研究による新たな古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点を形成する目的で、令和4年4月1日に設置されました。本学の歴史の中で、人間社会研究域を出身母体とする全学研究所は、本研究所が初めてです。

我が国には、古代文明の研究を行う研究所、研究センターがいくつかあります。しかしそれらは、世界の特定地域に栄えた一つの古代文明に特化した研究所、研究センターです。それに対して、金沢大学は、特定の地域や特定の古代文明にその研究対象を絞るのではなく、地球儀を俯瞰する古代文明の研究所とする方向性を選択しました。現代社会では、世界の社会・文化の多様性を理解するグローバルな視点が何よりも重要だと考えたからです。古代文明・文化資源学研究所では、世界各地の古代文明を研究する第一線の研究者たちが、世界遺産登録遺跡を含む古代文明の中心地と周縁で世界をリードする発掘調査を展開し、お互いに切磋琢磨しながら人類史の解明に寄与することを目指します。そして、世界各地の古代文明研究をつなぐ横串として、パレオゲノミクスを始めとする理系、医系の研究を用います。これによって真の文理融合研究を具現化し、人文社会系の考古学という既存の概念を打ち破り、新しい古代文明の研究スタイルを創成していきます。

すでに2年以上にわたり新型コロナウイルスによるパンデミックが世界に暗い影を落とし、やっとパンデミックからの脱出が見えかかってきた矢先に、ウクライナで悲惨な戦争が起こり世界は将来の見通しが効かず混乱し一寸先は闇といった状況に陥っています。このような時代に、古代文明を研究することにどのような意義があるのでしょうか。人類はこのような時代に、過去、何度も直面して来ました。我々は過去から学ばねばなりません。環境破壊や疫病の流行、人間同士の争いが絶え間なく起こって衰退・滅亡していった古代文明の歴史を知り、現代のわれわれの文明がそれを教訓として未来へと続く持続可能な社会を作っていかなければなりません。本研究所の構成員は、我々の調査研究が、常に現代社会とつながっていることを意識して研究を進めていきます。

「我々はどこから来たのか。我々は何者か。我々はどこへ行くのか。」ゴーギャンが我々に残したこの問いへの回答を、古代文明・文化資源学研究所は、考古学部門、考古科学部門、文化資源学部門という3つの研究部門で探し求めます。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

古代文明・文化資源学研究所長

中村 誠一



概要

【古代文明・文化資源学研究所設置の背景】

本学の強みである古代文明における考古学及び文化資源学の分野において、従来の「人文・社会系の考古学」というコンセプトから脱却した、文理融合型の新たな「次世代考古学」を確立するため、人間社会研究域の附属センターであった古代文明・文化資源学研究センターを発展的に解消し、令和4年4月1日に全学研究所として、「古代文明・文化資源学研究所」を設置いたしました。

【古代文明・文化資源学研究所の目標】

- (1) 本学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクスを融合させて格段の進化を図り、文理融合の新たな古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点形成を目指します。
- (2) 世界的な文化遺産の調査研究や保護・保全に関して、世界を俯瞰するネットワーク構築を行い、我が国を代表する研究機関として日本の国際貢献に寄与しSDGs達成に貢献する研究所を目指します。

【古代文明・文化資源学研究所の具体的な研究活動計画】

- (1) 上記目標の達成のため、令和4年度に世界的に活躍する中堅から若手の教員1名を採用するとともに、優秀な人材の獲得・育成を続ける計画です。
- (2) 上記目標の達成のため、令和4年度から海外の著名な研究大学や世界的研究者との国際共同研究をこれまで以上に推進し、若手研究者を中心とした頭脳循環プログラムを創成していく計画です。
- (3) 上記目標の達成のため、令和4年度に大型科研費（大型外部資金）の複数獲得に向けて研究所として取り組んでいくとともに、研究所に属する研究者が切磋琢磨し、インパクトファクターの高い国際雑誌に論文を掲載していきます。
- (4) 上記目標の達成のため、研究所に属する研究者は、様々なプログラムを通して、常にその研究成果を社会に発信し還元していきます。

運営組織

研究所長 中村 誠一

研究所副所長 足立 拓朗

研究所アドバイザー

關 雄二 国立民族学博物館名誉教授

常木 晃 筑波大学名誉教授

研究組織 (2022年8月1日現在)

考古学部門

部門長 足立 拓朗

専任教員 足立 拓朗 (古代文明・文化資源学研究所 教授)
藤井 純夫 (古代文明・文化資源学研究所 特任教授)
上杉 彰紀 (古代文明・文化資源学研究所 特任准教授)
久米 正吾 (古代文明・文化資源学研究所 特任助教)

兼任教員 河合 望 (新学術創成研究機構 教授)
小高 敬寛 (国際基幹教育院 准教授)

客員教授 小嶋 芳孝 (金沢学院大学 名誉教授)
小林 正史 (北陸学院大学 教授)
小柳 美樹
秦 小麗 (復旦大学 科技考古研究院 教授)

客員准教授 徳永 里砂 (上智大学 非常勤講師)

客員研究員 高橋 寿光 (日本学術振興会特別研究員 PD)
肥後 時尚 (日本学術振興会特別研究員 PD)
山口 雄治 (岡山大学文明動態学研究所 助教)
山藤 正敏 (奈良文化財研究所都城発掘調査部 主任研究員)
和田浩一郎 (国際文化財株式会社 / NPO法人文化遺産の世界)
Garcia Fernandez, Maria Gudelia (香川大学 講師)
Gregg M. Jamison (ウイスコンシン大学ミルウォーキー校 准教授)



考古科学部門

部門長 覚張 隆史

- 専任教員 覚張 隆史 (古代文明・文化資源学研究所 助教)
佐々木由香 (古代文明・文化資源学研究所 特任准教授)
- 兼任教員 佐藤 丈寛 (医薬保健研究域 助教)
- 客員教授 内山 純蔵 (イーストアングリア大学セインズベリー日本藝術研究所 研究員)
菊地 大樹 (中国蘭州大学考古学及博物館学研究所 教授)
- 客員准教授 中込 滋樹 (ダブリン大学トリニティカレッジ 助教)
- 客員研究員 阿部 善也 (東京電機大学 助教)
飯塚 義之 (中央研究院地球科学研究所 研究技師 / 岡山大学文明動態学研究所客員研究員)
石谷 孔司 (国立研究開発法人産業技術総合研究所 研究員)
板橋 悠 (筑波大学 助教)
北川 千織 (ベルリン自由大学エジプト学セミナーメンバー)
シュパイデル 玲雄 (ロンドン大学 フランシス・クリック研究所PD)
Pankaj Goyal (デカン大学大学院・研究所)

文化資源学部門

部門長 谷川 竜一

- 専任教員 中村 誠一 (古代文明・文化資源学研究所 教授)
- 兼任教員 谷川 竜一 (新学術創成研究機構 准教授)
- 客員教授 山形真理子 (立教大学 特任教授)
- 客員准教授 石村 智 (東京文化財研究所 無形文化遺産部 音声映像記録研究室長)
市川 彰 (コロラド大学ボルダー校人類学部 ポスドク研究員 /
名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター 共同研究員)
- 村野 正景 (京都文化博物館 学芸員)
- 客員研究員 五木田まきは (独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター 客員研究員)
古手川博一 (ホンジュラス国立自治大学)
野口 淳 (東海大学文化社会学部非常勤講師 / 日本考古学協会理事)

専任・兼任教員の研究概要

【考古学部門】

足立 拓朗 (あだち たくろう)

(所属：古代文明・文化資源学研究所 教授、専門：西アジア考古学)

<研究内容>

西アジアの新石器時代から鉄器時代にかけての遊牧民・移牧民を研究対象としており、以下の研究を進めています。新石器時代においては、移牧民の貝製品交易の研究を行っています。地中海産貝と紅海産貝の貝製品の分析から、貝製品の双方向の連鎖交換システムを明らかにすることが目的です。銅石器時代においては、スプーン形土製品の研究を行っています。従来、村落遺跡から出土していましたが、金沢大学が調査している砂漠地域の祭祀遺跡で出土しており、その新たな機能に注目して研究を進めています。先史時代におけるスプーンは、離乳食の摂取のために使用されたとする仮説を立てており、世界各地の先史時代のスプーン遺物との比較も行なっていきたいと考えています。青銅器時代においては、武器研究を進めています。現在は特に槍の研究を進めています。今後は棍棒の研究にも取り組んでいく予定です。アラビア半島の青銅製武器の編年を構築することが目的です。鉄器時代においては、イラン系遊牧民の起源について研究を行なっています。これまでは土器の型式学的研究を進めてきましたが、今後は文化財科学の手法を取り入れた研究を実施していく計画です。

<主な著書・論文>

- ・ Adachi, T. and S. Fujii (2022), "Chalcolithic Ceramic Spoons from Harrat al-Juhayra 1 and 2, Southern Jordan". *Studies in the History and Archaeology of Jordan XIV*, Amman: Department of Antiquities.
- ・ Adachi, T. (2019.2), "A Chronological Division of the Iron Age III Period at the Tappe Jalaliye in Giran, Northern Iran". In: S. Nakamura, T. Adachi, and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, pp.319-322, Rokuichi Shobo, Tokyo.
- ・ Adachi, T. and S. Fujii (2018.4), "Shell Ornaments from the Bishri Cairn Fields: New Insights into the Middle Bronze Age Trade Network in Central Syria". *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, pp.239-246, Harrassowitz Verla.
- ・ Adachi, T. and S. Fujii (2018.3), "Wadi Hedaja 1 and 2: A Chronological Assessment Based on Unearthed Artifacts". *al-Rafidan* 39: 55-69.





藤井 純夫 (ふじい すみお)

(古代文明・文化資源学研究所 特任教授、専門：西アジア考古学)

<研究内容>

「肥沃な三日月弧」外側の乾燥地で、先史遊牧民遺跡の調査を続けています。調査の目的は、(先史時代の末から現代に至るまで一貫して中東社会を特徴付けている)遊牧部族の形成過程を明らかにすることにあります。中東社会の最も内奥に潜む、中東社会ならではの史的特質。それを探りあてたいというのが、私の研究の学術的「問い」です。

主な調査区は、ヨルダン南東部のジャフル盆地 (1995~) とサウジアラビア北西部のタブーク高原 (2012~) です。一時はシリア中部のビシュリ山系 (2007~2011) でも調査していましたが、現在は中断しています。年代的には、「肥沃な三日月弧」外側の乾燥地に家畜ヤギ・ヒツジが初めて導入された先土器新石器時代Bから、本格的な部族社会が成立したとされる前期青銅器時代までの、約5000年間が対象です。そのため、先土器新石器時代の移牧出先集落から、後期新石器時代の屋外祭祀施設、銅器時代の半農半牧集落、前期青銅器時代遊牧家族のキャンプ址など、様々な遺跡を発掘してきました。

約30年に及ぶ調査を振り返って思うのですが、沙漠の中には沢山の歴史や文化が埋もれています。定住域の大都市遺跡だけが人類の文化遺産ではありません。長い道程、酷暑、砂嵐、水の補給、安全の確保、その他諸々辛いことばかりですが、発見の喜びはそれをはるかに上回ります。これからも沙漠の調査を続けていきたいと思えます。

<主な著書・論文>

- ・ Fujii, S. (2022), "Harrat Juhayra 202 and the Jordanian Badia Early PPNB: Fresh perspective on the PPNA/PPNB transition in the southern Levant". In: Nishiaki, Y. et al. (eds.), *Tracking the Neolithic in the Near East: Lithic Perspectives on its Origins, Development and Dispersals*, pp.341-356, Leiden: Sidestone Press.
- ・ 藤井純夫 (2022) 「「後ろ手に縛る」--食糧生産革命と複雑社会の形成」 稲村哲也・山極壽一・清水展・阿部健一 (編) 『レジリエンス人類史』 pp.120-140、京都大学学術出版会。
- ・ Fujii, S., al-Mansoor A. A., et al. (2021), "Excavations at Wadi Sharma 1: New insights into the Hijaz Neolithic, North-western Arabia". In: M. Luciani (ed.), *The Archaeology of the Arabian Peninsula 2: Connecting the Evidence*, pp. 15-42, Vienna: Austrian Academy of Sciences.
- ・ Fujii, S. (2020), "Late Neolithic cultural landscape in the al-Jafr Basin, southern Jordan: A brief review in context". *Studies in Ancient Art and Civilization* 24:13-32.
- ・ Fujii, S. (2020), "Pastoral nomadization in the Neolithic Near East: Review from the Viewpoint of social resilience". In: Y. Nara and T. Inamura (eds.), *Resilience and Human History: Multidisciplinary Approaches and Challenges for a Sustainable Future*, pp. 65-83, Singapore: Springer.
- ・ Fujii, S., Adachi, T. and Nagaya, K. (2019), "Harrat Juhayra 202: an Early PPNB flint assemblage in the Jafr Basin southern Jordan". In: Astruc, L. et al. (eds.), *Near Eastern Lithic Technologies on the move: Interactions and contexts in Neolithic Traditions*, pp.185-197, Nicosia: Astrom Edition.

上杉 彰紀 (うえすぎ あきのり)

(所属：古代文明・文化資源学研究所 特任准教授、専門：南アジア考古学)

<研究内容>

インド、パキスタンを中心とする南アジア考古学を専門としています。南アジアはその多様な自然環境に応じて、多様性と統一性を特徴とする社会と文化を築いてきました。この南アジアの特質について多面的に理解するため、西暦紀元前4000年頃から紀元後1000年頃までの5千年間に及ぶ長期的な時間スケールと多層的な空間スケールのもとで、南アジア各地に展開した社会、文化を物質文化の面から研究しています。

具体的には、前2600～前1900年頃に南アジア北西部にさかえたインダス文明、前1500～後1000年頃の北インドと南インドにおける鉄器時代・古代の文化について、それらが南アジアという一つの文化的世界の形成においてどのような役割を果たしたのか、人、物、情報の移動を含めた地域間交流という視点から解明を試みています。また、南アジア各地の研究者と共同で発掘調査や分布調査を行うとともに、各地の考古資料の記録化・分析を継続することにより、資料に即した実証的研究を進めています。また、南アジアの歴史の上で重要な役割を果たしたバハレーンでも調査・研究を行なっています。

この多様性と統一性を特徴とする南アジアの考古学研究は、古代文明社会の成り立ちや衰退、変容における地域社会のあり方や地域間交流の役割の理解に重要な手がかりを与えてくれるものと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ Uesugi, A. (2020), "Stone Beads from Taxila". *Ancient Pakistan* 30: 1-22.
- ・ Uesugi, A., Ambily C.S., Ajit Kumar, Rajesh S.V. and Abhayan G.S. (2019), "A Study on the Ceramic Sequence in the Megalithic Culture of Kerala". *Man and Environment* 44(1): 21-32.
- ・ Uesugi, A., Ambily C.S., Ajit Kumar, Abhayan G.S. and Rajesh S.V. (2019), "Stone Beads from Megalithic Burial at Niramakulam, Kerala". In: Rajesh S.V., Abhayan G.S., P. Nayar and E.R. Ilahi (eds.), *Human and Heritage: An Archaeological Spectrum of Asiatic Countries (Felicitation to Professor Ajit Kumar)*, pp. 1-22, New Bharatiya Book Corporation, Delhi.
- ・ Uesugi, A. (2019), "A Note on the Interregional Interactions between the Indus Civilization and the Arabian Peninsula during the Third Millennium BCE". In: S. Nakamura, T. Adachi, and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, pp.337-355, Rokuichi Shobo, Tokyo.
- ・ Uesugi, A. (ed.) (2018), *Current Research on Indus Archaeology*. Research Group for South Asian Archaeology, Archaeological Research Institute, Kansai University, Osaka.





久米 正吾 (くめ しょうご)

(所属：古代文明・文化資源学研究所 特任助教、専門：中央アジア考古学)

<研究内容>

現在、中央アジアに位置するキルギスとウズベキスタンの山岳・山麓地帯の遺跡で発掘調査をおこなっています。5000年前頃の青銅器時代に農耕牧畜文化が西アジアと中国から波及し、中央アジアの山岳・山麓地帯に食料生産経済が初めて成立した背景とその歴史的意義について、環境への適応、文化交流あるいは人の移動の観点から調べています。この調査研究をとおして、遊牧国家という中央ユーラシア地域を歴史的に特徴づける政治組織の基層形成について理解を深めたいと考えています。

中央アジアで発掘調査をおこなう前は、シリアやヨルダン、アゼルバイジャンなど西アジア・コーカサス地域での発掘調査に参加し、新石器時代から青銅器時代にかけての先史・古代社会における集団の階層化や社会の複雑化あるいは農耕牧畜の開始と波及に関する研究に取り組んでいました。また、アフガニスタンや中央アジア諸国を中心とした文化遺産保護国際協力事業の企画運営等にも携わってきました。

こうした経験を踏まえ、当研究所に所属する新旧両大陸の様々な地域を専門とする考古学研究者や近年の考古学研究において目覚ましい発展を遂げる自然科学分析を専門とする自然科学系研究者との連携をとおして、新石器時代以降のユーラシア大陸各地に生まれた農耕牧畜社会の発展過程の多様なあり方について理解を深めたいと考えています。また、海外考古学調査の持続可能な発展に向けて、調査をおこなうキルギスやウズベキスタン等での文化遺産の保護と活用に向けた実践的な取り組みも模索しています。

<主な著書・論文>

- ・久米正吾 (2021) 「中央アジア東部の初期農耕牧畜民遺跡から出土した動植物遺体と人骨の自然科学分析」 今村薫 (編) 『中央アジア牧畜社会研究叢書3 自然適応と牧畜』 pp.1-3、名古屋学院大学現代社会学部文化人類学研究室。
- ・久米正吾 (2021) 「ダルヴェルジン」 駐日ウズベキスタン共和国大使館 (編) 『ウズベキスタン シルクロード遺跡の旅』 pp.14-15、駐日ウズベキスタン共和国大使館、ウズベキスタン共和国観光・スポーツ省。
- ・久米正吾 (2021) 「東は東、西は西？—ユーラシア東西文化の出会いをめぐる考古学—」 古代オリエント博物館 (編) 『ORIENTE』 63 : 13-16。





河合 望 (かわい のぞむ)

(所属：新学術創成研究機構 教授、専門：エジプト学、考古学)

<研究内容>

古代エジプト新王国時代の歴史、文化について考古学と文献史学の双方から研究しています。具体的には新王国時代第18王朝の所謂「アマルナ革命」後のツタンカーメン王の時代から第19王朝のラメセス2世の時代あたりまでの歴史と文化です。これまでテーベ（現在のルクソール）やサッカラなどの遺跡で新王国時代の墓の発掘調査に参加してきました。最近では、JICA（国際協力機構）の大エジプト博物館合同保存修復プロジェクトの一環としてツタンカーメン王のチャリオット（二輪馬車）をはじめとする対象遺物の考古学的研究をおこなっています。また、これまで精力的に調査が実施されてきたテーベの新王国時代の墓地に比べて調査が不十分であったサッカラ遺跡における新王国時代の墓地の調査を試み、2016年から調査を実施していますが、2019年にサッカラ遺跡で初のローマ支配時代のカタコンベ（地下集団埋葬墓）を発見しました。これを受けローマ支配時代における埋葬習慣や来世観についても新たな研究テーマとして取り組んでおります。

<主な著書・論文>

- ・河合望『古代エジプト全史』雄山閣、2021年。
- ・前田耕作・河合望・馬場匡浩・長谷川修一・西山伸一・安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・山内和也・清岡央『オリエント古代の探究：日本人研究者が行く最前線』中央公論新社、2021年。
- ・河合望・谷川竜一編『文化遺産を見つけ、育て、生業とする』（『金沢大学文化資源学研究』27）、2022年。
- ・河合望・谷川竜一編『成熟社会の文化遺産とは何か－多様性と持続可能性を作り出すために－』（『金沢大学文化資源学研究』26）、2021年。
- ・Kawai, Nozomu (2021), "A newly discovered Roman catacomb at North Saqqara: Recent results and future prospects". In: Miroslav Bárta, Filip Coppens, Jaromír Krejčí (eds.), *Abusir and Saqqara in the year 2020*, pp. 331-346, Prague: Charles University, Faculty of Arts, Prague 2021.
- ・Kawai, Nozomu (2021), "Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: Preliminary results of the Archaeological Survey at North Saqqara. The 2016 and 2017 seasons". In: Miroslav Bárta, Filip Coppens, Jaromír Krejč (eds.), *Abusir and Saqqara in the year 2020*, pp. 245-262, Prague: Charles University, Faculty of Arts, Prague 2021.
- ・Kondo, Jiro and Nozomu Kawai (2021), "Japan". In: Andrew Bednarski, Aidan Dodson, and Salima Ikram (eds.), *A History of World Egyptology*, pp. 439-447, Cambridge: Cambridge University Press.
- ・Kawai, Nozomu, Yasushi Okada, Takeshi Oishi, Masataka Kagesawa, Akiko Nishisaka, Hussein Kamal (2020), "The Ceremonial Canopied Chariot of Tutankhamun (JE61990 and JE60705): A Tentative Virtual Reconstruction". *CIPEG Journal: Ancient Egyptian & Sudanese Collections and Museums* 4:1-11.



小高 敬寛（おだか たかひろ）

（所属：国際基幹教育院 准教授、専門：西アジア考古学）

<研究内容>

1996年よりシリアでのフィールドワークを通じて西アジアの先史考古学に携わり、近年はトルコ、アゼルバイジャン、ヨルダン、イラン、サウジアラビアでの遺跡調査にも参加してきました。そして、現在はイラク・クルディスタンを中心に活動しています。これらの国ぐにの領土を含む西アジアが果たしてきた人類史上の先駆的役割は広く知られていますが、特に研究の標的としているのは、農耕牧畜社会の成立から都市文明社会に至るまでの文化変化のプロセス、そしてその波及によって生み出された古代オリエントともいべき歴史的世界の成り立ちの解明です。

具体的には、土器資料の研究を基盤に、生態環境や生業経済、ヒトの移動性との関連を注視しながら、物質文化の時空間的枠組みについて精細かつ重層的に把握することを進めています。その方策として、関連諸分野を専門とする研究者たちの協力を得て「ザグロス山麓先史考古学プロジェクト」を主宰し、イラク・クルディスタン南東部、シャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ遺跡およびシャイフ・マリフ遺跡の調査を行なうとともに、国内外に所蔵されているイラク北部の諸遺跡から出土した考古資料の分析にも取り組んでいます。

こうした活動を通じて、人類最古の文明であるメソポタミア文明がおおよそ5000年前に誕生した経緯を実証的に跡づけ、世界各地の古代文明を比較研究するうえでの基軸を提供できればと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ Odaka, T., and O. Nieuwenhuys (2022), "Halaf Pottery in the East End: Insights from Tell Begum, Iraqi Kurdistan". *Orient* 57: 113-124.
- ・ Odaka, T. (2021), "Neolithic Potsherds from Tell Hassuna: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo". In: R. Özbal, M. Erdalkıran, and Y. Tonoike (eds.), *Neolithic Pottery from the Near East: Production, Distribution and Use*, pp.169-179, Istanbul: Koç University Press.
- ・ Odaka, T., O. Maeda, K. Shimogama, Y. S. Hayakawa, Y. Nishiaki, N. A. Mohammed and K. Rasheed (2020), "Late Neolithic in the Shahrizor Plain, Iraqi Kurdistan: New excavations at Shakar Tepe, 2019". *Neo-Lithics* 20: 53-57.
- ・ Odaka, T., O. Nieuwenhuys, and S. Mühl (2019), "From the 7th to the 6th Millennium BC in Iraqi Kurdistan: A Local Ceramic Horizon in the Shahrizor Plain". *Paléorient* 45(2): 67-83.
- ・ Odaka, T. (2019), "Neolithic Potsherds from Matarrah, Northern Iraq: The Collection of the University Museum, the University of Tokyo". In: S. Nakamura, T. Adachi, and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, pp.251-260, Rokuichi Shobo, Tokyo.
- ・ Odaka, T. (2018), "Neolithic Pottery with Horizontal Applied Bands from Tell el-Kerkh, the Rouj Basin". In: A. Gómez Bach, J. Becker and M. Molist (eds.), *II Workshop on Late Neolithic Ceramics in Ancient Mesopotamia: Pottery in Context*, pp. 25-34. Barcelona: Museu d'Arqueologia de Catalunya.

【考古学科学部門】

覚張 隆史（がくはり たかし）

（所属：古代文明・文化資源学研究所 助教、専門：考古分子生物学、文化財科学、動物考古学、馬学）

<研究内容>

2006年から遺跡出土人骨・動物骨を対象にした分子遺伝学および同位体生態学研究に従事してきました。特に、歯エナメル質のハイドロキシアパタイトに含まれるストロンチウム（Sr）や酸素など多種元素同位体比測定による哺乳動物の出生地推定や食性復元をこれまで実施してきました。2016年には、藤原京造営期において利用されていた家畜馬が東日本内陸部から持ち込まれたことを示し、大宝律令に記されていたとされる遠隔地の牧から朝廷へ献上する貢馬制度が大宝律令以前まで遡る可能性を示しました。また、2017年に日本列島の縄文人骨（伊川津貝塚）から世界で初めて全ゲノム配列を取得し、大陸集団との比較ゲノム解析によって縄文人の起源に関する新たな仮説を提示しました。現在では、遺跡出土骨から全DNA配列情報（ゲノム情報）を取得する手法開発やその応用を実践しており、日本列島の縄文時代・弥生時代・古墳時代における人骨・動物骨（馬・犬など）を対象に、それぞれの時代・地域のゲノム情報のデータベース化を進めています。同位体・ゲノム・形態・考古学情報の4つのデータを組み合わせることで、今まで提唱されてきた考古学における仮説検証に挑む新しい融合領域「考古科学“Archaeology by Science”」の創出を進めています。

世界の古代文明研究として、中国・韓国・ロシア・ホンジュラス・ヨルダン・サウジアラビア・エジプト・オマーン・モンゴル・キルギス・ウズベキスタン・カザフスタン・ウクライナ・インド・イランなどで研究を展開しています。

近年では日本列島の遺跡出土人骨の古代ゲノム解析データをさらに蓄積しており、日本列島人ゲノムが大まかに3つの祖先系統の要素で構成されていることを示し、「日本人の3重構造モデル」を国際共同研究として世界で初めて提唱しました。また、マヤ文明のコパン遺跡出土人骨のゲノム解析を進めており、文明を形成した人々の血縁関係・婚姻システム・階層システムの復元を試みており、同位体・ゲノム・形態・考古学情報を統合した考古科学研究を実践しています。

さらに、次世代考古学のために、パレオゲノミクスのデータを自動で解析するプラットフォームの開発を進めています。パレオゲノミクスが放射性炭素年代測定のように気軽に扱えるツールにするために、多検体処理のための自動前処理ロボット、次世代シーケンサー、オンサイト解析のための携帯型前処理装置、携帯型次世代シーケンサーなどを研究所に導入し、10年後を見据えた新しい考古学のためのシステム作りに注力しています。

<主な著書・論文>

- ・Cooke, Niall, ..., Takashi Gakuhari, Shigeki Nakagome (2021), “Ancient genomics reveals tripartite origins of Japanese populations”. *Science Advances* 7(38).
- ・Gakuhari, Takashi, Shigeki Nakagome, ..., Hiroki Oota (2020), “Ancient Jomon genome sequence analysis sheds light on migration patterns of early East Asian populations”. *Communications Biology* 3(1).
- ・McColl, Hugh, Fernando Racimo, Lasse Vinner, Fabrice Demeter, Takashi Gakuhari, ..., Eske Willerslev. (2018), “The prehistoric peopling of Southeast Asia”. *Science* 361(6397): 88-92.



佐々木 由香 (ささき ゆか)

(所属：古代文明・文化資源学研究所 特任准教授、専門：植物考古学、環境考古学)

<研究内容>

人間は周囲の植物資源をどのように選択して利用し、また改変してきたのかという人間と植物の関係史を研究テーマとしています。森林資源に恵まれた日本列島では、縄文時代以降、森林資源から食料を得ただけでなく、それらを利用して、構築物や、木製品、編組製品、漆製品などを製作してきました。さらに、約8000年前以降の居住空間の周りでは、資源をより利用しやすくするために人間が関与した植生作っていたことが一部の地域では明らかになりつつあります。

こうした人と植物の関わり史を研究するためには、考古学的に遺構・遺物を検討して時空間的に位置付けるだけでなく、自然科学分析の成果を用いて植物遺体自体や周辺の自然環境を明らかにし、考古遺物の年代と一緒に議論する必要があります。そのために、主に種子・果実や葉などの大型植物遺体の分析や、樹種同定、レプリカ法による土器圧痕分析、土器付着炭化植物遺体の分析を自ら実践し、人間が資源として利用した植物遺体を検討してきました。また博物館や埋蔵文化財調査機関などと連携した共同研究で当時の技術知を解明するために、自然科学分析で明らかにした素材や植物の知識と、民俗調査で得られた知識を合わせて、実験や製品を復元する作業を行なっています。ニワトコなどの現生種実を用いた実験を通して過去の植物資源利用の新たな側面を見いだしたり、編みかごなどの製作を通じて遺物の観察だけではわからない技術の様相を発見したりしています。

研究所では、様々な時代・地域の考古学研究者や自然科学研究者、地元の埋蔵文化財に携わる研究者と連携して、新たなフィールドも見つけていきたいと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ 佐々木由香 (2021) 「七社神社前遺跡出土土器の種実圧痕からみた縄文時代前期の植物利用」『北区飛鳥山博物館研究報』 23: 3-12。
- ・ Noshiro, S., Y. Sasaki and Y. Murakami (2021), *Importance of Quercus gilva* (イチイガシ) for the prehistoric periods in western Japan. *Japanese Journal of Archaeology* 8(2): 133-156.
- ・ 佐々木由香 (2020) 「植物資源利用からみた縄文文化の多様性」『縄文文化と学際研究のいま』(季刊考古学別冊31)、pp.69-84。
- ・ 佐々木由香 (2019) 「土器種実圧痕から見た日本における考古植物学の展開」庄田慎矢編『アフロユーラシアの考古植物学』クバプロ、pp.180-194。
- ・ Sasaki, Y. and S. Noshiro (2018), Did a cooling event in the middle to late Jomon periods induce change in the use of plant resources in Japan?. *Quaternary International* 471: 369-384.





佐藤 丈寛 (さとう たけひろ)

(所属：医薬保健研究域 助教、専門：分子人類学)

<研究内容>

北東アジアを中心とした地域の古代人および現代人のゲノム多様性情報を用いてヒト集団の歴史を明らかにする研究に取り組んでいます。特に古代人のゲノム解析は、現在では消滅してしまった過去のヒト集団の遺伝情報を得ることができるため、人類の歴史を理解する上で非常に有用な研究手法であると考えています。現在は北海道礼文島のオホーツク文化期の遺跡やバイカル湖周辺地域の新石器時代～中世の遺跡から出土した古人骨のゲノム解析を行っています。

また、ゲノムワイド関連解析 (GWAS) という手法を用いてヒトの形態形質に関連する遺伝子多型の探索にも取り組んでいます。顔の形態、耳の形態、体毛の濃さ、皮膚の色といった軟部組織の表現型に関連する遺伝子多型が同定できれば、古代人の骨形態からは復元することができなかった特徴までもゲノム情報から復元できる可能性があります。さらに、特定の表現型に関連する多型周辺のゲノム領域の多様性を分析することで、その表現型が過去に自然選択を受けたかどうかを検証することもできます。

このような手法を組み合わせることで、北東アジア地域におけるヒト集団の移住・混血の過程や北東アジア人に特徴的な表現型が獲得されるに至った過程を明らかにしていきたいと考えています。

<主な著書・論文>

- ・ Sato, Takehiro, Noboru Adachi, Ryosuke Kimura, Kazuyoshi Hosomichi, Minoru Yoneda, Hiroki Oota, Atsushi Tajima, Atsushi Toyoda, Hideaki Kanzawa-Kiriyama, Hiromi Matsumae, Kae Koganebuchi, Kentaro K Shimizu, Ken-ichi Shinoda, Tsunehiko Hanihara, Andrzej Weber, Hirofumi Kato, Hajime Ishida (2021), "Whole-genome sequencing of a 900-year-old human skeleton supports two past migration events from the Russian Far East to northern Japan". *Genome Biology and Evolution*. DOI: 10.1093/gbe/evab192
- ・ Nomura, Akihiro, Takehiro Sato, Hayato Tada, Takayuki Kannon, Kazuyoshi Hosomichi, Hiromasa Tsujiguchi, Hiroyuki Nakamura, Masayuki Takamura, Atsushi Tajima, Masa-aki Kawashiri (2021), "Polygenic risk score for low-density lipoprotein cholesterol and familial hypercholesterolemia". *Journal of Human Genetics*. DOI: 10.1038/s10038-021-00929-7
- ・ Sato, Takehiro, Shigeki Nakagome, Chiaki Watanabe, Kyoko Yamaguchi, Akira Kawaguchi, Kae Koganebuchi, Kuniaki Haneji, Tetsutaro Yamaguchi, Tsunehiko Hanihara, Ken Yamamoto, Hajime Ishida, Shuhei Mano, Ryosuke Kimura, Hiroki Oota (2014), "Genome-Wide SNP Analysis Reveals Population Structure and Demographic History of the Ryukyu Islanders in the Southern Part of the Japanese Archipelago". *Molecular Biology and Evolution* 31: 2929-2940. DOI: 10.1093/molbev/msu230
- ・ Sato, Takehiro, Razhev Dmitry, Tetsuya Amano, Ryuichi Masuda (2011), " Genetic features of ancient West Siberian people of the Middle Ages, revealed by mitochondrial DNA haplogroup analysis". *Journal of Human Genetics* 56: 602-608. DOI: 10.1038/jhg.2011.68

【文化資源学部門】

中村 誠一（なかむら せいいち）

（所属：古代文明・文化資源学研究所 所長・教授、専門：マヤ文明研究、マヤ考古学、文化資源学）

<研究内容>

私の専門は、古典期（紀元250～900年頃）と呼ばれる最盛期マヤ文明の研究です。古典期のマヤ文明社会は、旧大陸の古代文明のように政治的に統一されることがなく、現在のメキシコ南部からホンジュラスの西部にかけて60から70の王国が存在したと言われていました。それらの痕跡は、各地に古代都市遺跡として残されていますが、初めて現地へ渡ってから39年にわたる研究歴のうち、後半の23年間は世界遺産登録されている遺跡を中心に調査研究して来ました。現在はホンジュラスのコパンのマヤ遺跡（1980年文化遺産登録）とグアテマラのティカル国立公園（1979年複合遺産登録）で調査研究を行っています。

コパンでの調査研究は、宇宙線ミュオンMuonを使った王墓の探索やコパン王の一人と思われる埋葬の同位体分析やゲノム解析を始め、先端的な文理融合研究を行って王朝史の解明を目指しています。1980年代後半から2000年代にかけて、碑文解読学、考古学、図像学、形質人類学、同位体化学による学際研究で確立された定説では、コパン王朝は西暦426/427年に、カラコルCaracol（ベリーズ）およびティカル（グアテマラ）と関係する外来王ヤシュ・クック・モという人物において創始され、この人物はペンシルバニア大学博物館調査隊が発見したフナルという建造物内石室墓の被葬者であると言われて来ました。欧米の研究者たちは、その定説に基づき、精緻なコパン王朝史を築きあげていますが、文理融合研究の成果とともに、自身がコパンにおける過去の発掘調査で収集して来た一次資料を使って、王朝創始時期の検証を行い、不明な部分の多い王朝史の前半部の歴史を明らかにしたいと考えています。

一方、グアテマラ・ティカル国立公園では、コパン王朝創始時期におけるティカル王朝の比較研究を行っています。ここでは、2012年からティカルの都市中心部の北のアクロポリス区域をティカル国立公園と合同で調査研究対象としています。現在は、建造物5D-35の修復保存に注力しており、考古学的な発掘調査は、修復保存作業に伴う事前発掘に限定しています。しかしながら、ティカルでは28年ぶりとなるマヤ文字を刻んだ石碑の断片が発見されるなど、小規模な発掘でも大きな成果を挙げています。また、JICAや文化庁と連携しSDGs達成に向けた国際協力活動に注力しており、文化資源学的な実践研究を行っています。その一つは、ティカル周辺の6つのコミュニティ住民を対象として、彼らが世界複合遺産という文化資源・自然資源を活用して、どのようにして自分たちの生活向上につなげていくか、コミュニティ住民や地元行政、カウンターパート政府機関と一緒にその方策を考え、導き出す研修活動を毎週オンラインで行っています。もう一つは、遺跡の調査や記録、修復保存に必要な三次元計測の方法とそのデータの活用法を教える研修事業です。オンライン研修では、英語の講義にスペイン語の通訳を付けて行うため、中南米全体に門戸を広げており、中南米の数多くの国から希望する人が参加しています。

また、現在は、コロナ禍で中断していますが、2018年までは学生たちの海外インターンシッププログラムや異文化体験実習もティカルとコパンの双方で行っていました。早くコロナ禍が収束して、ティカルやコパンで、再び、国際交流活動が再開できる日が来ることを願わずにはられません。

<主な著書・論文>

- ・ Nakamura, Seiichi 2021 “PROARCO II (Proyecto Arqueológico Copán, Segunda Fase) : Objetivos, Justificación, y Resultados Preliminares” (PROARCO II, コパン考古学プロジェクト第二フェーズ：目的、実施意義、予備成果), *Kanazawa Cultural Resource Studies*, Vol. 28. (スペイン語と英語の2カ国語で執筆)
- ・ 中村誠一（2021）「マヤ文明コパン遺跡における古典期王権に関する諸問題」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会金沢大会資料集』319～322頁。
- ・ 中村誠一（2021）『ラテンアメリカ文化事典』（共著/2-20「文化遺産の活用と地域社会」17-5「日本人による古代アメリカの探求」を執筆）、丸善出版。
- ・ Suzuki, Shintaro, Seiichi Nakamura and Douglas Price 2020, “Isotopic proveniencing at Classic Copan and in the southern periphery of the Maya Area: A new perspective on multi-ethnic society”, *Journal of Anthropological Archaeology* Vol.60, pp.1-17.
- ・ Nakamura, Seiichi 2020, “Proyecto Arqueológico Copán (PROARCO): Investigaciones Arqueológicas en los Grupos 9L-22 y 9L-23, Copán, Honduras, Vol.3” (コパン考古学プロジェクトPROARCO：グループ9L-22, 9L-23における考古学調査(3)), *Kanazawa Cultural Resource Studies*, Vol. 25. (スペイン語と英語の2カ国語で執筆)



谷川 竜一（たにがわりゅういち）

（所属：新学術創成研究機構 准教授、専門：建築史）

<研究内容>

私は、20世紀のアジア近現代建築史を大きな専門枠として研究を進めてきました。建造物は近代化と植民地化を担う両義的なツールであり、それが故に衝突と融和、共存のメカニズムに関与します。より現場に即して言えば、多様な人々が関係しながら建造物が建設され、受容・利用され、更新されていく過程は、空間的なコミュニケーション史と見ることもできるでしょう。こうした視座から、「アジアにおける帝国日本の形成とその敗戦にともなう解体機軸の解明」の研究を、建築史・都市史・土木史を横断しつつ進めています。また、帝国日本の解体だけでなく、その解体された地にあらたに建設される新国家（韓国、北朝鮮など）のポストコロニアルな歴史も重要なテーマとしています。

特に力を入れている具体的テーマは次の三つです。

- 1) 日本との関係を視野に入れた朝鮮半島の20世紀建築・都市・土木史の解明
- 2) 日本によるアジア巨大開発史の解明——特に水力発電所やトンネル、超高層ビルやホテルなどで構成された日本のアジア開発と対アジア戦後賠償の史的解明
- 3) 出稼ぎトンネル坑夫集団・豊後土工の全容解明

<主な著書・論文>

- ・谷川竜一（2021）「日豊本線のトンネル建設工事と南・北海部郡の地域社会——豊後土工成立前夜の建設労働者たち」『土木史研究講演集』41、土木学会、pp.55-62。
- ・谷川竜一、クズネツォフ・ドミトリー（2021）「北朝鮮の都市計画家・金正熙——朝鮮戦争休戦（1953年）以前の履歴解明とその分析」『日本建築学会計画系論文集』86（781）、pp.1103-1113。
- ・谷川竜一（2021）「豊後土工と芋」『佐伯史談』237、佐伯史談会、pp.15-31。
- ・Tanigawa, Ryuichi and Dongchun Seo (2020), “Architecture teachers during the early days of North Korea: Between liberation from Japanese colonial rule and the establishment of a socialist state”. *Japan Architectural Review* 4(1): 155-167, Architectural Institute of Japan.
- ・谷川竜一（2020）「1958年、平壤・青年通りにアパートが建つ」『思想』1161、pp.38-61。

外部研究資金採択情報 (2022年8月1日現在)

科学研究費補助金 (研究代表者になっている資金のみ)

学術変革領域研究(A)ー計画研究

- | | |
|-------|---------------------------|
| 覚張 隆史 | パレオゲノミクス解析プラットフォーム開発とその応用 |
| 佐々木由香 | 土器に残る動植物痕跡の形態学的研究 |

基盤研究(S)

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 中村 誠一 | パレオゲノミクスによるマヤ文明コパン王朝のダイナミクス解明 |
| 藤井 純夫 | 中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究 |

基盤研究(A)

- | | |
|-------|-------------------------------------|
| 覚張 隆史 | シン・パレオゲノミクスが創る博物館資料群活用の新展開 |
| 久米 正吾 | 原シルクロードの形成ー中央アジア山岳地帯の初期開発史に関する総合研究ー |

基盤研究(B)

- | | |
|-------|---------------------------------------|
| 足立 拓朗 | 西アジアにおける先史遊牧民の起源と乳製品利用 |
| 上杉 彰紀 | インダス文明社会のダイナミズム：工芸品に関する学際的研究を手がかりとして |
| 河合 望 | エジプト、北サッカラ遺跡における新王国時代墓地の総合的調査研究 |
| 佐々木由香 | 土器敷物圧痕の素材植物と編組技法から見た縄文時代の技術知の解明 |
| 佐藤 丈寛 | 古代ゲノム解析による東アジアーシベリア境界領域における人類集団の変遷の解明 |
| 谷川 竜一 | 一国主義的北朝鮮都市・建築通史の批判的解体と多元的再構築 |

基盤研究(C)

- | | |
|-------|--------------------------------|
| 小高 敬寛 | メソポタミア初期農耕社会の再編期における物質文化の基礎的研究 |
|-------|--------------------------------|

新学術領域研究 (研究領域提案型) ー公募研究

- | | |
|-------|---------------------------|
| 足立 拓朗 | 西アジアの都市化と先史時代の遊牧民交易 |
| 小高 敬寛 | 都市化過程におけるメソポタミア外縁部の考古学的研究 |

その他の研究資金・委託事業資金 (研究代表者になっている資金のみ)

- | | |
|-------|--|
| 上杉 彰紀 | 日本学術振興会 二国間交流事業 (共同研究)：「アラビア内陸乾燥域・青銅器時代における都市形成と遊牧民社会の関係 (相手国：オーストリアとの共同研究)」 |
| 中村 誠一 | JICA草の根技術協力事業：「ティカル国立公園への観光回廊における人材育成と組織化支援プロジェクト」第2期 |
| 中村 誠一 | 文化庁 文化遺産国際協力拠点交流事業：「中米におけるマヤ文明文化遺産の三次元計測と取得データの活用に関する人材育成事業」 |

科学研究費補助金 (研究機関を「金沢大学」として申請した客員教員・研究員の案件のみ)

基盤研究(B)

中込 滋樹 縄文人の集団ゲノミクス：古代狩猟採集民の適応進化と現代におけるその遺産の解明

基盤研究(C)

飯塚 義之 非破壊化学分析による石器石材の研究：先史時代の石材の変遷について
内山 純蔵 先史巨大噴火の生業への影響に関する動物考古学的研究
北川 千織 古代エジプトのイヌ科・ネコ科動物の骨形態と次世代シーケンサーを用いたゲノム分析
小嶋 芳孝 ロシア沿海地方における渤海（698～926年）遺跡出土遺物編年の基礎的研究
小柳 美樹 呉越における青銅製農耕具の実証的研究
徳永 里砂 初期イスラーム時代のグラフィティを用いたアラビア半島ヒジャーズ地方の道の研究
村野 正景 学校博物館の成長のためのパブリック考古学的研究：京都府を中心に

若手研究

肥後 時尚 古代エジプトの「二柱のマアト」の実体解明－「死者の書」を手掛かりにして－

特別研究員奨励費

肥後 時尚 古代エジプトの葬祭文学研究－木棺資料への文献学・考古学的アプローチから－



金沢大学古代文明・文化資源学研究所規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、金沢大学学則第10条の2第2項規定に基づき、金沢大学古代文明・文化資源学研究所（以下「研究所」という。）に関し、必要な事項を定める。

(目 的)

第2条 研究所は、金沢大学の強みである考古学・文化資源学の分野に革新的なパレオゲノミクスを融合させて格段の進化を図り、新しい古代文明研究スタイルをもつ世界トップレベルの研究拠点を形成することを目的とする。

(部 門)

第3条 研究所に、次に掲げる部門を置く。

- (1) 考古学部門
- (2) 考古科学部門
- (3) 文化資源学部門

(職 員)

第4条 研究所に、次の職員を置く。

- (1) 研究所長
 - (2) 副研究所長
 - (3) 研究所教員（学内兼任教員及び特任教員を含む。）
 - (4) 研究員
- 2 前項の職員のほか、必要に応じ、その他の職員を置くことができる。

(客員教授等)

第5条 研究所に、客員教授及び客員准教授を置くことができる。

(研究所協力教員)

第6条 研究所に、必要に応じ、他の部局の教員を研究所協力教員として置くことができる。

2 研究所協力教員は、研究所の運営及び研究等に協力するものとする。

(研究所長)

第7条 研究所長は、研究所の管理及び運営を総括する。

2 研究所長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

3 研究所長が欠けたときの補欠の研究所長の任期は、前任者の残任期間とする。

4 研究所長の選考については、別に定める。

(副研究所長)

第8条 副研究所長は、研究所長の職務を補佐する。

2 副研究所長は、研究所教員のうちから研究所長が指名する。ただし、その任期は、指名した研究所長の任期を超えないものとする。

(研究所教員の選考)

第9条 研究所教員の選考については、別に定める。

(研究所会議)

第10条 研究所に、金沢大学古代文明・文化資源学研究所会議（以下「研究所会議」という。）を置く。

- 2 研究所会議は、次に掲げる事項を審議する。
- (1) 研究所の運営に関する事項
 - (2) 研究所の中期目標及び中期計画の策定並びに中期目標に係る事業報告書の作成に関する事項
 - (3) 研究所長の候補者の選考に関する事項
 - (4) 研究所教員及び研究所協力教員の選考に関する事項
 - (5) 研究所の予算及び概算要求に関する事項
 - (6) その他研究所の教育又は研究に関する重要事項

(研究所会議の組織)

第11条 研究所会議は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 研究所長
 - (2) 副研究所長
 - (3) 研究所教員
 - (4) その他研究所会議が必要と認めた者
- 2 前条第2項第3号及び第4号の事項を審議する場合は、前項に定める者のうち教授の職にある者に限るものとする。

(研究所会議の議長)

第12条 研究所会議に議長を置き、研究所長をもって充てる。

- 2 議長は、研究所会議を主宰する。
- 3 議長に事故があるときは、議長があらかじめ



指名した委員が、その職務を行う。

(会 議)

第13条 研究所会議は、委員の過半数が出席しなければ会議を開き、議決することができない。

2 議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、特別の必要があると認められるときは、3分の2以上の多数をもって議決することができる。

(委員以外の者の出席)

第14条 研究所会議は、必要があると認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事 務)

第15条 研究所の事務は、関係部署の協力を得て、人間社会系事務部において処理する。

(雑 則)

第16条 この規程に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、研究所長が別に定める。

附 則

- 1 この規程は、令和4年4月1日から施行する。
- 2 初代研究所長の任期は、第7条第2項の規定にかかわらず、令和5年3月31日までとし、再任を妨げない。





〒920-1192 Kakuma-machi, Kanazawa
Kanazawa University
Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources

〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学
古代文明・文化資源学研究所
<https://isac.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html>

© Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources